

兵庫が育む 心豊かで自立した人づくり

兵庫教育

6 月号
2017 No.796

特集

学習指導の充実

— 継続的な授業改善の推進 —



新しいたくさんの友達と元気いっぱい

～丹波市立青垣小学校～



月刊「兵庫教育」

URL:<http://www.hyogo-c.ed.jp/kenshusho/>

発行：兵庫県教育委員会
編集：兵庫県立教育研修所

特集

学習指導の充実
—継続的な授業改善の推進—

学校訪問

ふるさと青垣を愛し、自ら学びたくましく生きる児童生徒の育成！

～青垣から発信するコミュニティ・スクール～

丹波市立青垣小学校

管理職による随想

故郷に思いを寄せて

南あわじ市立八木小学校長

もり けんたろう
森 健太郎 1

論文

これからの授業改善

奈良教育大学次世代教員養成センター 准教授

あかざわ はやと
赤沢 早人 4

教育実践

コミュニケーションを生かした学びの中で生きる力を育てる

伊丹市立緑丘小学校 主幹教諭

おおた ゆうこ
太田 裕子 8

生徒に力を付ける授業デザインの研究

～チャレンジ！アクティブ・ラーニング 真のアクティブ・ラーニングとは何か～

神戸市立北神戸中学校長

たなか しげあき
田中 重明 12

思考力・判断力・表現力を伴う英語力の育成

～タスクやプロジェクト活動の指導を通して～

県立尼崎小田高等学校 教諭

にもり まさと
二森 正人 16

授業実践研修レポート

小学校 算数科 2けたをかけるかけ算のひっ算

授業者：加西市立北条小学校 教諭

みょうい まさひろ
明井 真宏

県立教育研修所 義務教育研修課 24

「いじめ未然防止プログラム」の活用（第14回）

「教師用映像補助資料」を活用した授業案の理解

県立教育研修所 心の教育総合センター 28

授業づくり

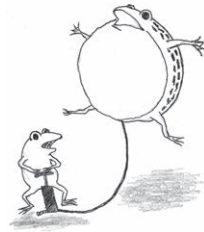
数のまとまりに着目するための素地的活動を

神戸大学大学院人間発達環境学研究科 教授

おか べ やすゆき
岡部 恭幸 30

6 月 号
イラスト

高砂市立竜山中学校
臨時講師 藤原 宏樹



グローバル化する社会への対応（第30回）

マレーシアを通して見た日本

県立神戸高等学校 教諭 ながさか けんじ 長坂 賢司 32

施策解説

教職員の勤務時間適正化推進プラン

～児童生徒と向き合う時間の確保と、ワーク・ライフ・バランスの実現に向けて～

県教育委員会事務局 教職員課 35

連載講座

特別な教育的支援を必要とする児童生徒への指導（第50回）

～通常の学級における「合理的配慮」の提供について 「事例報告書」から～

県教育委員会事務局 特別支援教育課 39

コラム「教育の接点」

教科書

神戸新聞社特別編集委員兼論説顧問 はやし よしき 林 芳樹 40

編集後記

トピックス P20～23

〔但馬〕香美町立奥佐津小学校

立派なサイズのさつまいも 22

〔播磨東〕稲美町立加古小学校

スムーズな移行をめざして 21

〔播磨西〕姫路市立別所幼稚園

夢中になって遊ぶ幼児を育てる 22

〔県立〕県立氷上特別支援学校

道の駅での販売学習 20

〔丹波〕篠山市立城北畑小学校

俳人松尾芭蕉に挑戦！ 23

〔神戸〕神戸市立西野幼稚園

家庭や地域とのかかわりを通して、
よい生活習慣を育む 20

〔阪神〕尼崎市立立花北小学校

やる気・根気・元気な体育 21

〔淡路〕洲本市立鮎原小学校

バリケードを巨大キャンパスに 23

〈編集企画〉 掛川 淳一 栗脇 治郎
田尾 みづほ 村中 利章

里 知純 瀬尾 智宏
県立教育研修所（義務教育研修課、情報教育研修課）

特 小学校
No.1 集

コミュニケーションを生かした
学びの中で生きる力を育てる



伊丹市立緑丘小学校
主幹教諭 おおた ゆうこ
太田 裕子

1 はじめに

本校は研究テーマ「主体的に関わる子どもをめざして－自ら考えを発信し、学びを深め合う授業づくり－」を設定している。真剣に考えよう、仲間の声に耳を傾けようとする子どもたちの姿が本校にはあり、学びたいという意欲を持つ子どもが多い。さらに、ペア学習・グループ学習を取り入れ、子ども達の関係や互いの在り方を大切にする事で柔らかな空気が教室に生まれるように、すべての子どもに居場所があるように考えてきた。自分の意見が言える、仲間の違った意見を聞けることで、学習へ向かう意欲も、理解の深まりも生まれる。

このような取り組み方は、生きた学力を身につけるものだとも考えた。「学ぶことが好き」「苦手だけど好き」という子どもの姿が生まれる。



▲ 班での活動の様子

2 取り組みとして

実践 1

「5年生～6年生へ向かう自分を育てる～」

5年生1年間のテーマとして、「いのち」を設定し、学年で取り組んだ。

5年総合『身近な環境を考える』2015年度版 —緑丘小学校をよくなるプロジェクト—

ねらいとして

いよいよ緑小の最高学年、6年生に進級する。その前に、5年間のまとめとして学校のことを見直し、もっと素敵な緑丘小学校にするための活動を考え、これから迎える最高学年という立場を受け止める。

設定

- ・図書室から
- ・保健室から
- ・運動場から
- ・校舎の様々な場所から
- ・緑小「あろは」から・・・

単元の計画（進行）として

- （1次）—目標設定するために—
 - ・私たちが考える、素晴らしい学校とは
 - ・現状把握
 - ・緑小に足りない事は？
- （2次）—伝えるために・プレゼン準備—
 - ・資料集め・・・他校の資料の取り寄せ（5年の先生に頼む）
 - アンケート調査（他の学年へ頼むときは、その担任の先生に事前をお願いしておく）
 - 街角調査→直接、ろう下や校庭などで調べる
 - ・資料作成・・・現状をしっかりと把握したもの
 - わかりやすさの工夫
 - 原稿をしっかりと書く（文章を大切に）
 - 伝えたいことに合った方法を選ぶ（何種類の方法を使ってもよい）

※図書・保健・各学年の先生方への協力依頼（5年の先生がします）

※ビデオ・写真の使用はOK

- （3次）—伝えよう。私たちの考えを—

①参観日におうちの方へ伝えよう

プレゼンに挑戦

- しっかり書き上げた原稿 新聞
フリップボード
映像（電子黒板・パソコンもOK）等
②後輩たちに伝えよう
・クラス回り ・ポスター ・直接の呼びかけ 等

★結果をしっかりを受け止め、自分たちの考えた最高の緑小へ向けて、自分自身が動くことが本当に大切だということを受け止めておこう

最後の仕上げとして、『身近な環境を考える』として、緑丘小学校をよくするプロジェクトを立ち上げた。

報告文をベースとし、教師間で単元計画を共有することはもちろんであるが、計画書を子どもたち自身も持って動いた。プロジェクトチームの仲間と共に課題設定から、調査活動、プレゼンテーションなどを経験をする。自分で考えを持ち、それを共有していくことで、自分の考えが深まる事や発言していく事の大切さ、心地よさを経験してほしいと考えた。

成果

自分たちが緑丘小学校の最高学年としてどう向かうのか、保護者にも伝える場を作った。

保護者からの感想

- プレゼン本当に素晴らしかった！
大人顔負けの発想や考え方に、感心しました。みんなの「行動宣言」が実行すれば、緑小はさらに素敵な学校になると思います。
- すごく自信が持てているのだ！
聞く姿勢・感想・手の上がる多さにびっくりです！この情報収集量に、まとめ方、構成力に驚きました。クラス・学年・学校と、このプレゼンをもとに、すばらしい緑小が誕生しそうですね。

実践2

「6年生～緑小での軌跡を確認し自分の生き方を見つめる～」

6年生は「生きる」というテーマを基に、教師と子どもたちが共に考えた。

6年3学期の卒業間近の時期に、自分のこれまでの事、将来の事として、どう生きるかを6年生として考える時間を設定した。

－われら緑小！3つの軌跡－

設定

- ・卒業を前に自分たちの足跡を学校の中で見つける
- ・6年間の軌跡をたどり、卒業へ向けての自分の姿、在り方を見つめ直す
- ・班の仲間と共にディスカッションし、ミニプレゼンとして仕上げる

単元の計画（進行）

- ①テーマを探る
- ②ある程度決まったテーマを基に、学校の中の風景を写真に切り取る
- ③テーマを決め、3枚の写真に絞りこむ
- ④原稿を作成
写真を基に
はじめ→なか1→なか2→なか3→おわり
という構成の文にまとめる
発表時間5分以内にまとめる
- ⑤発表（ミニプレゼン）の構成を考える
電子黒板使用に際し、パソコンの操作・ナレーション・進行などの役割を決め、より説得力のある発表になるよう、班で練り上げる
- ⑥発表 一小学生最後の参観、家族へ

伝えよう われら緑小の軌跡－

8つの班での発表とする

見る側も講評を添える



▲ 電子黒板を使っのプレゼンの様子

○子どもたちの決めたテーマ

「3つのはじまり～そしてありがとう～」
 「3つの歩んだ道」
 「3つの感謝～いろいろなあたたかさ～」
 「3つの別れ」等



▲ 子どもたちが使った原稿の一部

○子どもの原稿の1例

『3つの喜び～やったー！と叫んだ日～』

（はじめ）みなさんも喜びを感じた事があると思います。私たちもこの学校生活の中でたくさん「やったー」と叫んだり、喜んだりしました。その中でも思い出深い3つを紹介します。



▲ なわ跳び練習

（なか1）「朝から集まろう」と決めてから、みんなでなわ跳び練習しました。それから私は「絶対毎日練習しよう」と思いました。その思いはみんな一緒に、朝はほとんどの人が集まりました。その努力は報われ、本番では「300！」という声上がり、本当にうれしかったです。結果316回！市内第9位。



▲ 届けられた花

（なか2）みんなの意見がはってある掲示板。今まで見たことのないぐらいすてきな花が届いた。掲

示ではっている時「思い出すなあ」「あっ、これ、みんなで話したなあ」と思いました。みんなで頑張ったから届いた花の水替えができるのは本当にうれしいです。



（なか3）このクラスの人々と出会えた教室。授業ではそれぞれの得意分野を出し合い、協力して問題を解いたりできた。教える方も、分からないと言った方も、できることが増えたと思います。すごくうれしかったです。

（おわり）今まで、私たちは、学校生活の中で喜びをたくさん感じました。中学でも勉強、部活など、成功した喜びを大切にしたいと思います。お父さん、お母さん、家でもたくさんの喜び、写真や心に収められる良い思い出をたくさんつくろうね。

成果

小学生最後の参観に発表をした。プレゼンの後、親子座談会も行った。

保護者からの感想

○参観ありがとうございました。「3つのはじまり」ついこの間だったように感じる入学式を思い出しました。共に過ごしたランドセル、校庭、そして、大切なとき。時間。充実した6年間でそこに詰まっていると思いました。しっかりと卒業へと向かっている様子に成長を感じました。

○参観日での皆の発表、とてもまじめに取り組み、学校を愛している、楽しい小学生生活を送ってきた事が伝わってきました。

みんなで経験したことを自分の力（学力・生きる力）とすることを目指したい。

→一人一人のまとめとしての作文

→卒業式終了。教室での「生き方宣言」へと続ける。

生き方宣言

○私は、家族・友達・仲間を大切にし、1秒1秒の時間も大切にできる、心が豊かで自分の意見をしっかり言える自分で生きる。

○僕は、遅れていた時みんなに支えられてきた。だから、人が困っていたら、自分のわかる範囲だけでも教えて、自分が困った時は教えてもらえるように生きる。

○僕は、今まで教えられてきた事、仲間といった事を忘れずに、いつも笑顔で自分の夢に向かい絶対に命を大切に生きて生きる。

子ども達は、様々なコミュニケーションの中で、自分の持っている力をより大きく伸ばしていったように思う。

その輪の中に、保護者を巻き込んでいくことの大切さも感じている。

3 成果

東日本大震災の次の年。2分の1成人式で、子どもが書いた作文を紹介し、成果に変えさせて頂きたい。

大切な家族 緑丘小学校 4年

3月11日、東日本大震災が起きた。その日まで、私は福島県の浪江町に家族みんなでくらしていました。

毎日お母さんの作る朝ご飯を食べて学校に通っていました。

運動会のリレーの時には、

「ガンバレーイケイケ！」

と、お父さんお母さんが大きな声で応援して

くれて、すごくがんばる事ができました。

一緒にお菓子を作ったり、手作りの誕生日ケーキでお祝いしたり、いっぱい一緒に遊んでくれました。そんな毎日が、すごく当たり前のことだと思っていました。

しかし、震災の後、私はお父さんお母さんとは一緒にくらしなくなりました。避難所を転々とした後、私とお兄ちゃんとおばあちゃんの三人は、おばさんのいるこの伊丹市でくらす事になりました。お父さんお母さんは、震災で被害にあった地域の復興のために福島に残り、今もがんばって働いています。両親と別れ、さみしくてたまらない私に、お母さんは毎日、朝と夜、必ず電話をかけてくれます。

「今日も一日元気でがんばろう」

という言葉に元気をもらいます。そして、月に二度、この伊丹に会いに来てくれます。その時は浪江にいた時のようで、嬉しくてたまりません。

家族と一緒に暮らすことが当たり前だったあの頃より、お父さんお母さんが自分たちの事をどれほど大切に思ってくれているのか、わかったような気がします。私自身も、家族と一緒にいられる時間をすごく大事にしたいと思えるようになりました。

私を応援してくれる学校の先生やたくさんの友達、そばで見守ってくれるおばさんに、ありがたい気持ちを忘れず、元気一杯すごしていきたいと思います。

自分が二十歳になった時、どんな大人になっているのか、今はわかりませんが、お父さんやお母さんのように、地域のため、大切な家族や仲間のために一生懸命頑張る大人になりたいと思います。

『生きる』こと『いのち』のことをしっかりと考えさせる授業をすることの原点。すべての子に、自分を、未来をしっかりと見つめて今を生きる権利があります。これからもコミュニケーションを生かした学びの中で生きる力を育てていきたい。

特 中学校 集 No.2

生徒に力を付ける 授業デザインの研究

～チャレンジ! アクティブ・ラーニング
真のアクティブ・ラーニングとは何か～



神戸市立北神戸中学校
校長 中 重明
た なか しげあき

1 はじめに

神戸市立北神戸中学校は、昭和60年（1985年）に組合（三田市・神戸市）立八景中学校から分離独立し、今年で33年目を迎える。校区は三田市、三木市、西宮市、宝塚市に隣接し、その広さは長田区と兵庫区を併せた面積にほぼ等しい。創立当初はまだ宅地開発が進んでおらず、生徒の大半は農村部から通っており、生徒数も300名を下回っていた。その後、宅地開発が急速に進み、現在の生徒数は855名（平成29年4月現在）で、ほとんどがニュータウンの生徒となった。遠距離通学生には自転車通学とバス通学が認められており、400名以上が自転車で通学している。生徒数の増加は今後も続く見通しで、神戸市内屈指のマンモス校となっている。

ム着席、清掃活動など学校生活の基本を厳しく指導するとともに、部活動に熱心に取り組ませた。また、“たすけ隊”という生徒有志による地域貢献活動にも取り組み、今ではそれが本校の伝統となりつつある。このような実践の成果が表れ、数年前から落ち着きを取り戻している。

2 新たな目標への挑戦

生徒が落ち着くとともに、新たな目標が見えてきた。真面目に授業に取り組むようになった生徒たちだが、我々が期待するほど学力は伸びなかった。その一因に若手の多い教師集団の指導力に課題があると考え、特に教師の授業力向上を目標に、新たな取組を行った。

学校現場の急速な世代交代、若年化は本校だけの問題ではない。若い教員はまじめで熱意と体力はあるが、未熟な部分が少なくない。せっかく前向きに取り組めるようになった生徒たちの期待に応え、彼らを一層成長させるには、まず若手教員の授業力向上が急務である。また、新学習指導要領にも見られる学力観の転換があり、ベテランも旧態依然とした授業スタイルの改善を迫られている。そこで、5年前から生徒のより深い学びをめざした授業改善に着手している。

(1) お互いを知る「授業参観月間」

まず、授業を自由に参観できる環境を整えた。若手がベテランの授業からヒントを得たり、他教科の授業から自分の教科に生かせるものを見つけたりでき、相互に刺激し合えると考えたからである。自由に授業を参観できるきっかけとして「授業参観月間」を設定した。

学 校

地域との交流

市立北神戸中学校「たすけ隊」



全校生からボランティアを募って、お祭りの手伝いなど地域から寄せられた様々な要望に応える「たすけ隊」という取り組みをされています。
この活動を通じて、奉仕の精神を育むとともに、地域とのつながりも強化されています。

▲「愛の輪運動」広報誌に紹介された“たすけ隊”

7年ほど前まで本校は、厳しい荒れに見まわれていた。立て直しを図ろうと当時の教職員は、生徒に当たり前のことを当たり前に実践させるという目標を立て、それを地道に積み重ねていった。具体的には、挨拶やチャイ

- 2学期の後半の比較的行事の少ない時期、約1カ月間を授業参観月間に設定する。
- 教員は、期間中に自分の教科とそれ以外の教科を併せて3時間以上の授業を参観する。
- 参観した教員は、授業の感想や学び、気付きを参観シートに記入し、授業者に渡す。

授業参観 依頼シート	
() 先生へ	
月 日 () 校時 年 組の授業を	
参観させていただきます。よろしくお願いします。	
参観者名 ()	
*依頼された先生は、下記のどちらかに○をつけ、参観者にこのシートを渡してください。	
・OKです。	
・この時間は都合が悪いので、月 日 () 校時はいかがですか。	
初回線	
*授業を見終わった後、このシートに感想を書いて、授業者に渡してください。	
授業参観 感謝シート	
() 先生へ	
(感想)	
(質問 等)	
参観者名 ()	

▲ 参観依頼や参観後の感想を書く「授業参観シート」

(2) 全員で取り組む「全教科研究授業」

「授業参観月間」は教科にこだわらず教師が学び合おうという試みであったが、「全教科研究授業」は教科に特化し、同一教科の教員同士が学び合うことで、教科担任としての専門性を磨き授業力を向上させようという取組である。

- 年度初めの教科打合せで、その年度の授業者を決定する。
- 授業者がつくった指導案を教科打合せで検討する。
- 教科打合せを受けて修正した指導案で授業を展開する。同一教科の教員全員が参観する。全職員に周知し、他教科でも参観可能な者は参観する。
- 他教科の参観者は、簡単なコメント(感想)

を授業者に提出する。

- 同一教科の教員で、放課後に授業反省会を実施し、成果や課題を確認する。

同一教科の全員が指導案づくりから参加するので、連帯感が強まる。ベテラン教員が若手教員に授業のポイントを伝授したり、若手教員がベテラン教員にICT機器の活用を伝授したりすることで、OJTが推進された。



▲ 英語科全員での指導案検討会

(3) 職員研修で「北中生の学力分析」

本校生の実態をしっかり把握し、どういうことに取り組めば学力向上が図れるかを話し合う研修を平成26年度の夏季研修から実施しており、この成果を2学期以降の授業に反映するように努めている。

- 全国学力・学習状況調査の問題や公立高校入試問題、生活実態調査アンケートの結果を分析する。
- 夏季研修第1段階では、5教科の教員は教科毎のグループになり、お互いの分析や本校生の全国学力・学習状況調査の結果(前年度分)をもとに意見交換する。実技教科の教員は、生活実態調査の分担に基づくグループになり、本校生と全国の結果を比較しながら分析する。
- 夏季研修第2段階では、お互いの分析結果を報告し、意見交換する。
- まとめとして、2学期以降の授業の中で各教科や学年、学級で重点的に指導すべき内容を確認し、共有する。

これまで教科や学年、係任せにしていた分析を全員で行うことで課題を共有し、学校全

体で取り組む意識をもつことができた。本校生は、基礎学力はあるものの資料の活用や思考・判断を問われる問題、表現力を問われる問題に課題があることがわかり、資料を見て考えたり、少人数での学び合いに積極的に取り組んだりすること、言葉や文章で表現する機会を増やすことなどを確認し、授業に意識して取り入れた。

3 アクティブ・ラーニングとカリキュラム・マネジメントへの挑戦

平成26、27年度の実組の結果、学校評価アンケート（平成26年度と27年度の比較・4点満点）では、「学校は分かりやすい授業に取り組んでいる」の項目で保護者の評価は、2.72点から2.81点と0.09点上昇した。また、「学校は授業内容・授業確保の工夫をし、学力向上に努めている」の項目での保護者の評価も2.74点から2.80点と0.06点上昇している。一方で、この2つの項目に対する教員の評価は、横ばいかやや下降気味ということで、教員自身は授業改善にまだ満足していないことがうかがえた。

そこで、神戸市総合教育センター（KEC）の研究開発事業に応募し、2年間（平成28・29年度）の研究指定を受けることとした。これによってKECの支援を受け、授業改善を一層進めるとともに、教育活動の見直しも進めていくことになった。つまり、アクティブ・ラーニング（AL）とカリキュラム・マネジメント（CM）に取り組み、現在2年目を迎えている。

(1) アクティブ・ラーニング

AL＝“活動的な学び”という直訳が教師の頭から離れず、生徒に目立った活動がなければならぬという誤解がある。教師が真にアクティブにしなければならないのは、生徒の頭脳である。生徒の頭脳をアクティブにし、生徒自らが進んで知識を獲得、理解し、学力をつけるための効果的な指導法、授業のあり方の研究を新たな課題として取り組んでいる。基本は、少人数（4人程度）のグループ学習「まなび愛」の実践とその効果の研究で

ある。

平成28年度の主な研究活動は、以下の通りである。

- 4月 職員研修 ALの考え方と模擬授業
- 6/14 全校研究授業 3年英語科
- 8月 夏季研修 北中生の学力分析



▲ 全校研究授業 3年英語科

- 10月 教科別研究授業（音楽科・理科）
- 11月 教科別研究授業（社会科・体育科）
- 10/25～11/21 授業参観月間
- 11/1 公開研究授業 2年国語科
講師：小国喜弘教授（東京大学大学院）
- 2/2 公開教育研究会1.2年全学級公開授業
研究授業 1年数学科
講師：小国喜弘教授（東京大学大学院）
- 通年 「まなび愛」通信による啓発活動



▲ 研究協議で生徒の学びを分析



▲ 公開教育研究会の研究授業 1年数学科

研修だより まなび愛 第13号 平成28年8月29日(月) 神戸市立北神戸中学校 学習指導部長 井内 千恵美	先生方の「まなび愛」 その1 先週は夏季職員研修では、1・2年生は神戸市学力定着度調査、3年生は全国学力・学習状況調査の結果分析を行いました。教科ごとのグループ討議では、よくできていたところと課題があったところについて、丁寧に、そして熱く、分析していただけたと思います。また、全体会の討議内容発表では、自分の教科だけではなく、他教科の課題についても知り、つながりを大切に克服していこうという思いが感じられました。約1時間30分の研修でしたが、温かい雰囲気の中で取り組むことができ、同僚性が高まったと思います。 本日からの授業では、今回の研修で得たことを活かしていきたいですね。今年度は、結果分析について学年集会で生徒に説明することになりました。(3年生は、結果発表が解禁された後にお願いします。)簡単にその内容を紹介します。全職員で、よくできることも課題があるところも把握しておき、みんなで「力のつく授業づくり」に取り組んでいきましょう。 【1年生】 ※国語 よくできていたところは、漢字の読み書きです。これからも、前後の文脈から意味を考えて漢字を書けるようにしていきます。課題があったのは、話の流れや展開に沿って聞き取ったり、内容を読み取ったりするところです。班での学び合いや、全体での発表のときに、友達の意見をふまえて話すことや、構成に注意して読み取るような活動を取り入れていきたいです。 ※数学 無解答の生徒が少なく、問題に意欲的に取り組む姿勢があります。また、基礎的な力がしっかり身についています。課題があるのは、応用問題で読み取る力が弱く、問題自体を理解できていないところです。応用問題を解く機会を増やし、問題で何を問われているのかを考えるようにしていきます。 ※社会 よくできていたのは、どの分野も偏りなくできていたところです。自分の言葉で説明するような場面を設けて、さらに力が伸びていくようにします。課題があったのは、時代によって苦手なところがあることです。特に、縄文時代について忘れていた人が多かったと思います。復習を取り入れて、今まで習ったことを忘れないようにしていきます。 ※理科 教えられたことに関する知識を活かして答えることは、よくできています。課題は、一つの目的や課題を解決するための論理的な思考力が弱いところです。他教科や実生活とのつながりを感じながら、学習を進めてほしいと思います。
---	--

▲ 公開教育研究会の研究授業 1年数学科

(2) カリキュラム・マネジメント

詳細な教育計画があっても、誰もそれを意識しない。自分の教科は理解していても、他教科で何を学習しているか知らない。子どもの成長が連続であるのに、小学校で何を学ん

できたか、どのように学んできたか知らない。日々の教育活動に追われ、子どもの将来を見通したビジョンも描けない。これが多忙な教員の現実ではないか。教員の最も大切な仕事は子どもへの学びの提供、即ち授業づくりである。その時間を生み出す第一弾として平成28年度2学期から2カ月に1回の職員会を試行した。産み出された時間は、自己の研鑽に充てる。また2カ月以上先の議案提出は、教員に長期的展望をもたせることができた。また、夏季休業中に教育活動の見直しの課題を全教職員に課した。

それらを踏まえ、平成29年度から以下のことを実行することとした。

- 職員会を2カ月に1回とする。
- 儀式的行事の時間を短縮する。
- 会議削減、行事精選に継続的に取り組む。

4 終わりに

平成24年度から本校独自で取り組んできた授業改善に加え、KEC研究開発事業の指定を受けることができたことは意義深い。平成29年度も、KECや東京大学大学院・小国喜弘教授の指導と支援を受けながら授業改善に取り組むことができる。新しい学力観を踏まえた授業改善は未来を担う生徒を育てる上で欠かせない。生涯を通じて学び続ける人づくりのためには、中学生段階で学ぶことの喜びや意義をしっかりと自覚させることが重要である。

また、学校現場の多忙化が叫ばれ、文部科学省も本格的な多忙化対策に踏み出そうとしている。そんな中で、学校としても既存の教育活動にまず疑問をもつことが重要である。職員会は毎月あるのが当たり前、体育会があるのは当たり前、3年生は修学旅行に行くのが当たり前といった考えを全て打ち破る必要もないだろうが、「？」をもつことは大切である。学校教育への期待とニーズの高まりに真摯に向き合ってきた学校だが、そのせいで本来大切にしなければならないものを見失ってはいないだろうか。常に「？」をもち続け、その答え「！」を探す取組を続けていきたい。

特 高等学校 集 No.3

思考力・判断力・表現力
を伴う英語力の育成
～タスクやプロジェクト活動
の指導を通して～



県立尼崎小田高等学校
教諭 にもり まさと
二森 正人

1 はじめに

英語の授業では、リスニング・リーディング・スピーキング・ライティングの4技能の運用能力をつけることは大切である。しかしながら、授業デザインは4技能の運用能力の育成だけにとどめず、思考力・判断力・表現力を伴う英語力の育成が学習指導要領においても強く求められている。そこで筆者は、英語を通し、文章の内容を深く理解することで思考力をつけたり、文章に関連した内容をさらに調べて発表し、英語表現が使われる正しい場面を判断できるなど、思考力・判断力・表現力をつけるために、タスクやプロジェクト活動を行う活用型の授業が必要であると考えた。

自分で発見した課題や与えられた課題の一番大切なことを見抜き、その重要ポイントを整理・判断し、自ら工夫した表現活動を行う活用型の授業の実践を通じて、生徒が自分で理解し、発信していく力を身につけることに取り組んでいる。

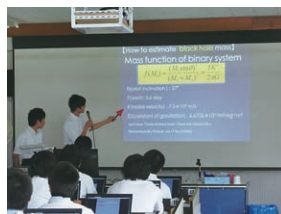
学習形態においても、ペアワークやグループワークが有効と思われる場面では、日常的に取り入れ実践した。学びの原則の一つに、協力すればよりよく学べ、考えが深まることが挙げられる。今日何人かでできたことは、明日は一人でできることにつながるの、考える過程などを共有し、徐々に一人で取り組めるように指導してきた。

学習内容への生徒の興味や意欲を喚起することや、学んだことが定着し、次に使えるよ

うに深く学ぶ機会を与えることを念頭に置き、現在勤務する尼崎小田高校で授業実践を行ってきた組み立てと、そのねらいを紹介する。

2 科学英語の取組

当校のサイエンスリサーチ科では、2年次に「尼崎運河の水質調査」、「タンポポの葉緑体のDNA解析」など、自然科学分野の課題研究に取り組んでいる。3年次には、その研究内容を用いたプロジェクト活動をしている。生徒たちがその活動のabstract（英文での要旨）をつくり、英語でプレゼンテーションすることに重点を置き指導している。



▲ English Presentation

(1) 研究に関連する語彙を知る

abstractやプレゼンテーションをスムーズに行うことができるよう、研究で行った実験方法の説明やグラフの説明に必要な語彙などを、図を用いながら紹介し、今後使うことができるようにしている。

(2) 課題研究のabstractを書く

2年次の課題研究は、2名から5名で研究を行っている。グループで協同して取り組ん

でいるが、内容の理解度に差があることから、一人一人にabstractを書かせている。一度、個人での取組を評価し、その後は、グループ内で持ち寄って表現をまとめながら、グループとしてのabstractをまとめさせた。2年次に日本語で課題研究の内容をまとめているが、簡潔な英文スタイルに合わせて書くことで、より研究の内容をはっきり理解することができる。また、5人の教員が各グループに対して英語で質問し、生徒に英語で答えさせる練習も行った。英語で答えられるまで内容をしっかり把握しているかを確かめると、英語で答える練習が今後のプレゼンの質疑応答のレベルアップにつながると考えた。

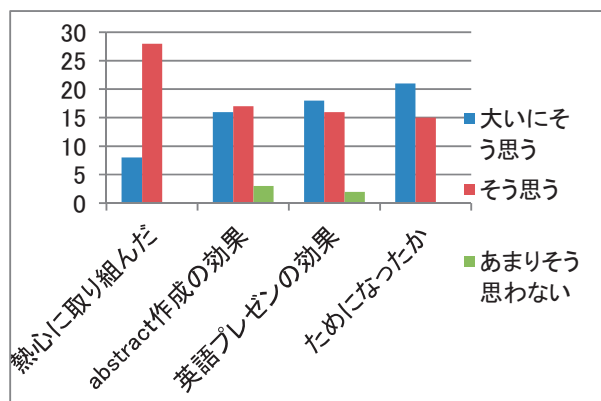
(3) 課題研究を英語でプレゼンテーション

abstract完成後は、英語プレゼンの準備に入り、日本語で発表したスライドを基に英語のスライドを作成させた。キーワードを中心に項目を載せ、また、図や画像を多く用いて、視覚的に理解しやすいようにスライドを作成するように指導した。効果的なプレゼンテーションになるよう問いかけ、図の説明などについてデモンストレーションした後、生徒たちの発表会を設けた。スライドに加えて、模型を作ったり、実物を持ってきたりするなど、わかりやすい発表に心がけていた。発表を終えた後の質疑応答では、キーワードを用いて説明していたが、スムーズにできたとはいえず、改善の必要性を感じた。

(4) 授業の効果とその評価

生徒の授業評価は、概ね英語を通して科学的な分野を学んでいくことに意義を実感した生徒が大半で、高い効果を挙げることができた。感想では、「生の英語に多く触れて、聴き取る力が格段に伸びた」「ALTと話すのがとても楽しかった」「科学分野の英語に多く触れることができた」と意見がある一方、「少人数で英語ディスカッションをもっとしたい」「英語で実験をしてみたかった」という前向きな声もあり、より実践的なことを取り入れる必要性も感じた。年間を通して、熱心にALTの説明を聴き、英語で質問するなど、積

極的な姿勢が見られ、将来、自然科学分野と英語の学習への動機付けとなっている。



▲ 生徒授業評価

(5) 課題と今後の展望

英語でのプレゼンテーションの際、質疑応答が十分に出来ておらず、質疑応答の練習回数を確保する必要がある。校内外のALT・大学研究者・留学生・保護者など多方面の方と複数回練習する機会を持つと有効である。練習を重ねることで、質疑の想定リストが充実することに加えて、発表する研究内容の理解も深まることにつながると考える。

また、3年次でうまくプレゼンテーションできるように、1年次から2年次の終わりまで、学期に1回ミニプレゼンの機会を与えてきた。動物や惑星といった自然科学に関連するテーマを与えてプレゼンの練習を行い、発表に慣れることをねらいとした。テーマに沿って写真と英文を準備し、発表するといったミニプレゼンの機会を数多く持つことで、生徒たちのプレゼン能力は向上すると考える。

3 ペア・ディスカッションの取組

普通科2年の英語表現Ⅱで、ペア・ディスカッションを活用した授業を行っている。小中高の他校の教員を招いて行った研究授業1時間分（テーマは「家庭のルール」）の内容を紹介したい。

(1) authentic（本物の英語）な教材を扱う

ALT 3名およびHR担任、そして筆者の家

庭のルールをビデオで録画し、授業で見せた。ネイティブの英語に触れて、効果的なリスニング練習とするとともに、家庭の雰囲気を感じやすいようにも心がけた。

(2) 題材をpersonalize（自分に関連）させる

事前に生徒それぞれが家で話をし、「家庭のルール」の例を挙げ、そのルールの価値観や理由を考えて書かせた。そうすることで、題材を自分と関連付けることができる。

(3) ペア・ディスカッションで考えを共有

ペアで話し合うようにすると、クラスの前で発表するのに比べて、英語で話す抵抗感が減ることや、発言する回数を多くすることができる。題材に関してペア・ディスカッションを複数回行い、ペア内でコメントしあうことで様々な考えを知ることができる。また、ペアのパートナーとの内容を4人グループ内で伝え合った。ペアでする時も、グループでする時も、数名に発言を促した後、内容や表現を言い換えたりコメントを加えたりし、即座にフィードバックを行った。年度当初から教科書のレッスンごとにペア内でプレゼンテーション（都道府県紹介、料理紹介、お勧めの場所紹介など）を行い、スピーキングの練習機会を設けて、ペア・ディスカッションを中心に据える授業づくりにつなげてきた。

(4) 個人でのライティング活動

クラス内で意見や例を黒板に書きだして共有した後、家庭のルールについて英文でまとめを書いた。2種類の課題を与えたが、1種類は、自分の家庭のルールとそれに対するペアのコメントをまとめて書かせた。もう1種類は、クラス内の生徒の家庭ルールの中で、なるほどと思った例を紹介しその理由を添えさせた。多様な考えを知ることによって思考を活性化し、その上で英語でまとめることができた。

(5) ファシリテーターとしての役割

①生徒が発言する機会を多くして、スピーキングの練習を増やすとともに、他の人の考えを知り、考えを深めることができた。

②ディスカッションやグループでアイデアを共有させた後には、数名の発言を促し、

内容や表現を言い換えたりコメントした。

(6) 今後の取組

①授業で扱う重要表現をリスニング練習でも取り入れたが、音読練習など、さらに練習する種類を増やし、習得できるように機会を増やしていく。

②ディスカッションの際、自然にアイコンタクトして生きた英語を話すことができるような場面を設けてアドバイスしていく。

〔授業を見ての先生方の感想〕

・先生（筆者）の目標である、生徒の自発的な発言を引き出すのは、深い学びがあってこそそのものだと思います。（中学校教員）

・達成させたいゴールに向かって、スモールステップを踏みながら、楽しく英語を身につける授業づくりは、小中高同じだと実感しました。（小学校教員）

4 ミニプレゼン、スピーチの取組

国際探求学科には、英語を使って活動することに積極的な生徒が多い。英語の運用能力を伸ばすと同時に、英語を通して幅広い知識を得ることも目標にしている。ここでは2つの活動を紹介する。

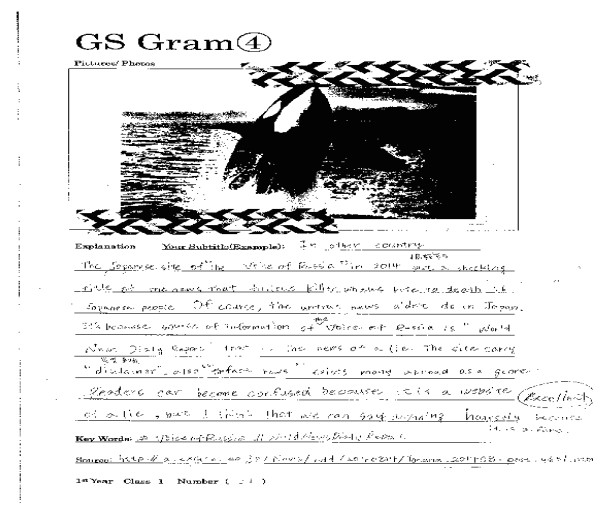
(1) ミニプレゼン

国際探求学科1年次では、ジェンダー、フェアトレード、難民、貧困など、人文・社会科学に関連するテーマについて英語で講義し、その内容をさらに各自が調べてプレゼンテーションを行った。テーマに沿って写真と英文をまとめ、発表するといったミニプレゼンの機会を数多く持つことで、生徒の情報収集力とプレゼン力の向上につながっている。

〔生徒の感想〕

・自分で調べて他の人に発表する。このことが、自分の知識をもっと深めることにつながると感じました。

・地球規模の問題と向き合い、どのような現状なのかを知ることができた。それを英語で書き、発表し、質問に答えることで、語彙力もついたし、自分の英語力も伸びました。



▲ ミニプレゼンの例

(2) スピーチ

国際探求学科2年次では、特色ある科目の授業において、一学期間を通して一人一人がスピーチ活動に取り組んだ。初めに、大学教授からスピーチの構想をどのように考えれば良いのか講義をして頂いた。個人の体験と社会の動きとのバランスを取りながら、内容に応じてどちらに重きを置いて考えをまとめていけばよいのか大変参考になった。

その後、英語で考えをまとめ、何度も添削を受けて書き直し、最終的には第12稿までに練り上げた。書き直す度に、文章が繋がっていない部分や、抽象的過ぎてわからない部分など、内容に関して問いかけをすることで、生徒自身に考えを整理させた。また、単語の選択、あるいはネイティブが使う表現なども見比べることで、表現力を磨いた。学期末に校内スピーチコンテストを実施し、最終メンバーに選ばれた9名は、全国英語弁論大会に出場したり、県のスピーチ大会阪神予選大会で審査員特別賞を頂いたりするなどの結果を得ることができた。

〔生徒の感想〕

・テーマについて情報を集め、より理解することができ、発音もきれいになりました。課題としては、よりきれいな発音をすることと、スピーチに合うジェスチャーをもっと取り入れようと思いました。

・スピーチでは、自分の考えていることを英語で表現する力がついたと思いました。わからない単語を調べることで、自分の英語力の底上げができました。

・大きな舞台でスピーチ出来て良い経験になりました。課題としては、もっと具体的に話を展開できるようにしようと思いました。



▲ スピーチ大会参加の様子

5 おわりに

生徒の力を伸ばすために、カリキュラム・デザインを体系的に行うことが求められている。行事や部活動などを含めて、学校教育全体をつないでいくことが肝要である。ただ、生徒たちが学校で過ごす時間で最も長いのは、言うまでもなく授業時間である。授業の改善を地道に行うことが、生徒の力を伸ばすことに直結すると考える。

初任校の豊岡総合高校の指導教官から、毎年、授業実践の取組をまとめておくよう助言を頂き、実践してきた。毎年振り返ることで授業の問題点が見えてきて、次年度には改善していくことが出来た。また、県立教育研修所や他の団体主催の研修会に参加し、その都度授業改善の視点を得て、自分の授業を省みることができた。その中には、指導と評価の一体化、アクティブ・ラーニングの視点なども含まれる。

尼崎小田高校において、公開授業週間、研究授業の実施、国際探求学科の授業を中心に英語のアウトプットの機会を工夫する気風、授業評価を行い生徒からのフィードバックを得る過程など、大きな影響を受けた。これからも授業を省みることを継続し、学習指導を充実させていきたい。